

ステップファミリーの子どもたち調査 (2)

重要な家族移行経験とライフコース

○明治学院大学 野沢慎司
大阪産業大学 菊地真理

1. 研究の背景と問題設定

親の離婚・再婚と子どもについては、マスメディアでも取り上げられ、社会の関心が高まりつつある。米国などでは親の離婚・再婚が子どもに与える影響を問う研究の蓄積が厚く、知見の評価をめぐる議論も盛んである (Amato, 2003)。日本でも、親の死や離婚、再婚という大きな家族移行 (family transition) 経験が子どもの教育達成などにおいて不利な結果をもたらす傾向を指摘する研究が現れつつある。しかし、現代日本の再婚後の家族において子どもたちがこうした家族移行をどのように経験しているのかを質的に把握する研究の展開は十分とはいえない。そこで、ステップファミリー (継親子関係を含む家族) を子どもの立場で経験した若年世代に対する探索的なインタビュー調査を実施した。親の離婚や死別、親の再婚などのライフイベントを子どもたちがどのように受け止めたのか、また家族・親族関係の再編・維持・変容がその後のライフコースにどのような影響を与えたのかを考察する。

2. 調査方法と対象者の特性

調査会社の登録モニター (関東・関西・東海地区在住者) に向けたインターネット上の募集に対する応募者をおもな対象として、2012年10月から2013年5月にかけて対面による半構造化インタビュー調査を実施した。分析には、両親の離別/死別後に親の再婚 (事実婚を含む) を経験した20~34歳の男女20名 (女性17名、男性3名) が含まれる。質問項目は、①親の離婚や再婚の経緯とその受け止め方、②継親との関係とその変化、③親の離婚 (死別) 後に同居した親や別居した親との関係、④きょうだい関係、継きょうだい関係、⑤祖父母、継祖父母など親族との関係、⑥学校の教師や友だちなどとの関係、⑦「家族」だと思ふ範囲 (家族境界) など。

3. 考察

海外の研究が示唆するように、ステップファミリーにおいて子どもたちが継親との間に形成する関係は多様である (Ganong et al, 2011; Allan et al, 2011 など)。インタビューケースの中には、継父・継母が継子にとって唯一の「父親/母親」的存在になったり、親ではないが親密で家族的な関係に発展したりしたケースから、継親との関係がストレスに満ちたものになるケース、さらには継親との関係が発達しないケースに至るまで、様々な関係が見られる。同一世帯内のきょうだい間の差異も大きい。世帯特性だけでなく、世帯内の家族ダイナミクスによるところも大きいと推測される。このような点も視野に含めて、継親および同居親が継子の教育達成・就職・結婚などに経済的・情緒的に支援的な役割を果たすケースとそうでないケースを比較検討する。

一方、両親の離婚を経験した場合、別居 (非親権) 親と子どもとの交流が (少なくとも一定期間) 途絶えてしまうケースが大半を占めた。これは、離婚後の単独親権を前提とし、離婚・再婚後の子どもの養育についての社会的チェック機能が希薄であり、曖昧で両義的な法制度の下で、非親権親の養育費支払いや面会交流が行われにくい現状を反映しているとみられる。別居親との交流を維持した少数ケースに着目して、ライフコースの選択/道筋に関わる影響を検討し、可能な限り社会制度の現状に対する批判的評価を試みる。

【文献】

- Allan, G., Crow, G., & Hawker, S., 2011, *Stepfamilies*, Palgrave Macmillan.
- Amato, P., 2003, "Reconciling divergent perspectives: Judith Wallerstein, quantitative family research, and children of divorce," *Family Relations*, 52 (4): 332-339.
- Ganong, L., Coleman, M., & Jamison, T., 2011, "Patterns of stepchild-stepparent relationship development," *Journal of Marriage and Family*, 73: 396-413.